

III 成果と今後の課題

赤城山西麓・暗色帶出土の石器群

AT降灰以前の石器群については、前代の伝統に立脚する石器群であるという認識からの分析(岡村 1976、横山 1976、佐藤 1988、安斎 1988)を要す。宮城県下の成果の他に、東京都下あるいは群馬県下での近年の成果から確実に3万年を越る石器群(前期旧石器)の存在が確実視されるなかで、今後、石器群の変遷や変質、地域の実態が次第に明らかとなろう。群馬県内より出土のAT降灰以前の石器群については、すでに、詳細な分析や論考(白石 1987)があり、自身も石器群の変遷と様相について概要を既に呈示(岩崎 1988)している。ここでは、勝保沢中ノ山遺跡・二地点より出土する石器群をAT降灰以前の石器群の変遷の中に位置づけ、さらに、出土層位や石器石材の問題について、若干の検討をおこなうこととした。

出土石器群の検討

a. 勝保沢中ノ山遺跡出土の石器

A区出土の石器群については4-7の項で、B区出土の石器群については5-7の項で、既に検討した。そのためここでは、A区およびB区より出土する石器群を比較検討し、両地点より出土する石器群の類似点や相違点を示す。

石器群の段階を示す指準的な存在であるナイフ形石器は、素材剥片の用い方(剥片を縦位に使用するか、剥片を横位に使用するか)により大別二群に分類できるものの、両地点より出土する石器群にはナイフ形石器・A群の有無というような石器組成の相違や資料数量が不足する。そのため、両地点より出土する石器群を同等に比較することは困難ではあるが、両地点ともに存在するナイフ形石器・B群について比較するなら、石器の形状が横長・台形状を呈し、裏面側から表面側への急峻な調整加工を施すという類似点と、A区出土のナイフ形石器は剥片を横位に、B区出土のナイフ形石器は剥片を縦位に使用するという顕著な相違とがそれぞれ指摘される。

両地点より出土する石器群の示す剥片剥離には明確な相違が存在する。A区には単設の打面より剥片剥離をおこなうもの(a類)、両設の打面より剥片剥離をおこなうもの(b類)、90°打面転移をおこない剥片剥離をおこなうもの(c類)、大形剥片を石核素材に剥片剥離をおこなうもの(d類)、の大別4種(a類~d類)の剥離手法が存在する。a類~d類の剥離手法では、c・d類に比べa・b類が数量的には主体を占め、a・b類は主体的な剥離手法として、c・d類は客観的な剥離手法として、評価することができる。一方、B区には同一の打面より剥離をおこなうもの(I類)、90°の打面転移をおこなうもの(II類)、I類やII類と石核形状の相違する大形剥片を石核素材とし剥片剥離をおこなう剥離手法(III類)、の大別3種の剥離手法が存在する。I類やII類の剥離手法には、打点が打面の周辺を廻る求心的剥離を示す場合や、打点を左右に振り、後退する場合、III類の剥離手法には、表裏両面のうちの一方を打撃面に一方を作業面に剥離をおこなうもの(III-a類)や、表裏両面で剥離作業をおこなうもの(III-b類)などの多様性が存在する。両地点ともに明確な打面の調整や再生はおこなわれないものの、平坦な打面(自然面ないし剥離面)より剥離作業をおこない、部分的な側縁調整や粗い頭部調整をおこなうこと、平坦な打面を得る場合に限り打面の作出をおこなうこと、など技

III 成果と今後の課題

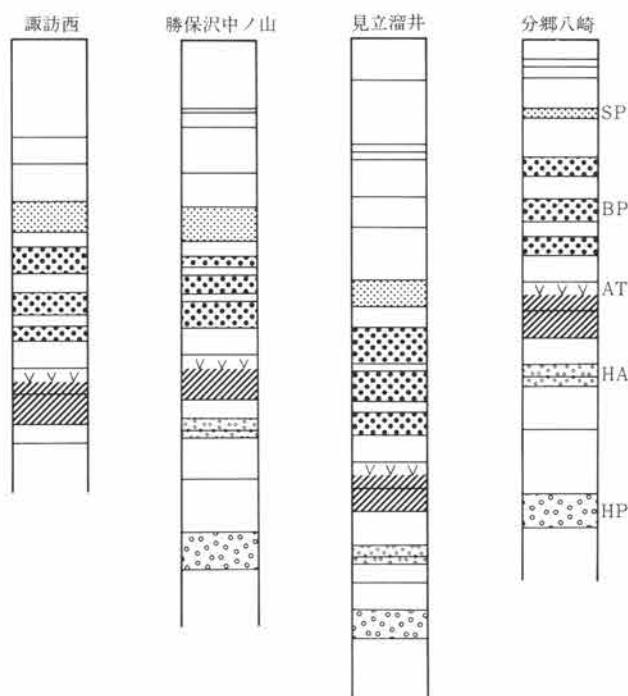
術上の類似性が存在する。一方、両地点より出土する石器群には、同一の打面から剥離作業が連続するA区出土の石器群と連続性のないB区出土の石器群という相違が指摘されよう。

以上、両地点より出土する石器群の類似点と相違点を呈示した。上述の異同に加え、両地点より出土する石器群には接合資料や同一母岩が認められないこと、A地点出土石器群はB地点出土石器群に比べ、出土層位は若干上位にあること、などから現状では石器群の同時性については否定的状況にある。

b. 周辺遺跡出土の石器

勝保沢中ノ山遺跡の周辺には、諏訪西・房谷戸・分郷八崎・見立溜井など5ヶ所の旧石器時代遺跡が存在する。ここでは、AT降灰以前の暗色帶より出土する石器群を分析し、石器群を類似点と相違点を示す。

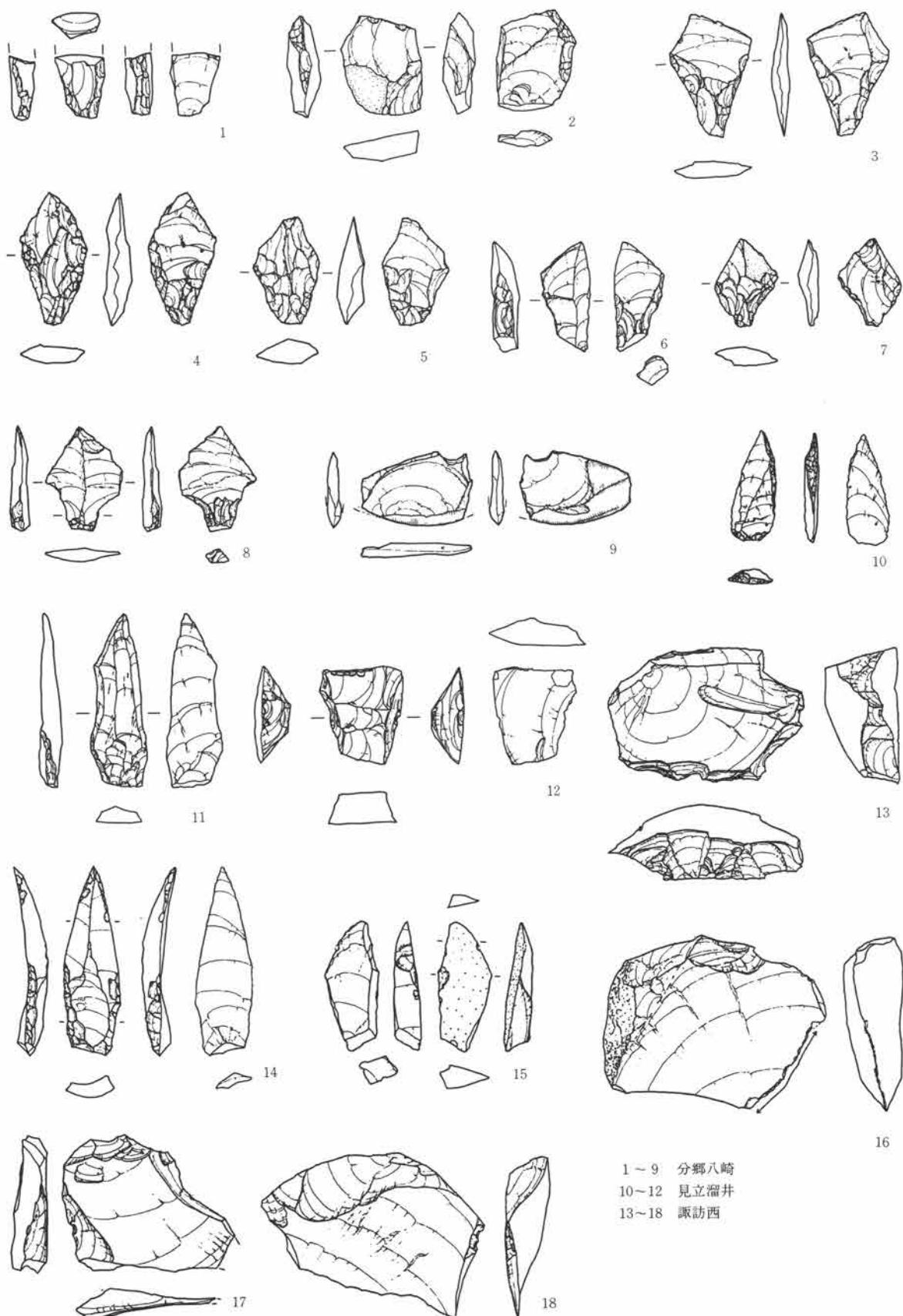
諏訪西遺跡には総計301点の石器が出土する。縦長剥片を縦位使用するA群に分類されるナイフ形石器が1点(第219図14)出土する。報告者の御教示によれば、このナイフ形石器には直接の接合関係は存在しないものの、接合資料-No.21(報告の記載No)と同一の母岩別資料に分類されること、接合資料(No.21)の空白部を埋め、接合する可能性があること、などが予想されるという。接合資料-No.21には、総計15点に及ぶ剥片が接合し、90°打面転移を伴い、縦長の剥片を作出している。このうち、1点(第219図15)には、基部側の両側縁に折断面が形成され、また、一方の側縁には微細な剥離が存在することからB群のナイフ形石器に分類される可能性がある。剥片剥離は90°の打面転移を伴い、打撃面と作業面を頻繁に移動し、剥離作業をおこなうことが出土石核や接合資料により推定される。第220図は、互いに接合する関係にはない剥片の形状、および、接合資料-No.21を構成する剥片の形状を示す集成図である。集成図に示す剥片形状より、縦長剥片を目的に剥片を剥離するということが理解され、大形の剥片を削器(第219図13・16~18)に、剥片形状の良好な縦長剥片をナイフ形石器のA群やB群(第219図14・15)に、それぞれ用いるようである。



第218図 ローム層の堆積状態

分郷八崎遺跡には、ナイフ形石器A群(欠損資料であるため明確でないが、二側縁加工のナイフ形石器である可能性が強い。第219図1)、ナイフ形石器B群(菱形に近い石器の形状を呈すII類を主体とし、I類を組成する。第219図2~8)、局部磨製石斧の他に、削器が出土している。B群の場合には、素材剥片を作出する段階で、背面上にある稜線を剥片の端部に取り込み、尖状部を作出し、機能部とする。裏面基部に特徴的な平坦剥離手法を施す局部磨製石斧を伴う段階の代表的石器群である。剥片剥離は90°の打面転移を伴い、打撃面と作業面を頻繁に移動し、剥片を剥離する。この剥離作業により作出される剥片のうちの、大形の剥片は石核の素材(盤状石核)として用いられることも多く、素材剥片の作出と石核素材の作出は分化した状態にはない。

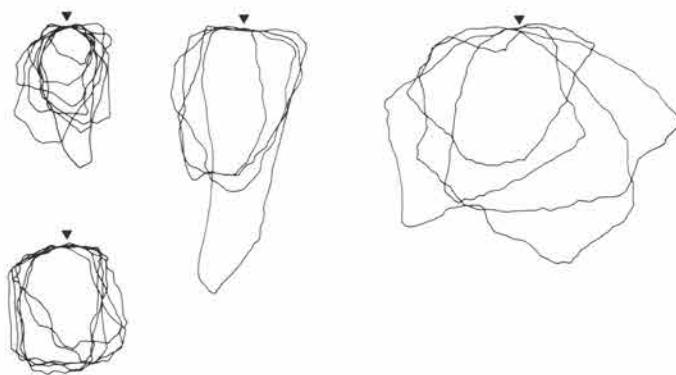
赤城山西麓・暗色帶出土の石器群



第219図 赤城山西麓出土の石器

1~9 分郷八崎
10~12 見立溜井
13~18 諏訪西

III 成果と今後の課題



第220図 諏訪西遺跡出土の剥片形状

出土石核は多面体石核や盤状横長剥片素材の石核が存在する。

見立溜井遺跡には、ナイフ形石器A群(第219図10・11)およびナイフ形石器B群(第219図12)が出土している。A群には基部加工のナイフ形石器のほかに、側縁加工に近い先端を斜めに大きく断ち截る先端加工のナイフ形石器が、一方、B群には縦長剥片を横位使用し、側縁に急峻な調整加工を施すナイフ形石器が、組成する。剥片剥離の実態は明確ではない。

c. 石器群の編年的な位置づけ

県内出土石器群の多くは、遺跡内で層位的な石器群の前後関係を確認することの可能な事例に乏しいため、石器群の漸移的な変質を把握し、石器群を位置づけることが極めて難しい。そこで、自身の論考では層位的な出土資料を型式学的に分析した須藤氏の成果(須藤 1986)に従い、「調整加工技術の発達に伴い複合的な調整加工技術から単一的な調整加工技術に変遷する」という調整加工技術の変遷を指標(佐藤 1988)とし石器群を位置づけ、変遷過程を呈示した。その結果、多様性に富む調整加工を施し、基部加工のナイフ形石器(A群Ⅰ類)を主体とする一群、背部加工を主体とするほかに、平坦剥離手法などの調整加工も多いナイフ形石器の諸形態を組成する一群、背部加工を主体に調整加工を施し、ナイフ形石器A群の諸形態が組成する一群、への変遷過程が指摘された。以上の指摘に加え、ナイフ形石器A群およびナイフ形石器B群の共伴関係を踏まえることにより、石器群の段階的な変遷が指摘され、西麓では、分郷八崎出土石器から勝保沢中ノ山出土石器(A区)や見立溜井出土の石器への変遷を呈示することができた(第6表)。ここでは、上述した石器群の変遷観に従い、勝保沢中ノ山遺跡(A区・B区)より出土した石器を編年的に位置づけ、呈示しておく。

勝保沢中ノ山遺跡・両地点より出土する石器群の中でA区出土のナイフ形石器の場合、A群では背部加工を主体に調整加工を施し、B群では剥片を横位に使用し台形状ないし切出状を呈す石器(Ⅰ類)が主体を占め、剥片の用い方や石器の形状は背部加工を主体に調整加工を施し、ナイフ形石器の諸形態が組成する後田遺跡より出土する石器に類似する。A群には石器組成の一部欠落、ないしは、B群には平坦剥離手法を施す事例が存在するなど、刃潰し加工の確立している後田遺跡出土石器に比べ、古期の様相を呈しやや先行する傾向が窺われるものの、石器群の組成上の類似性が指摘されよう。一方、B区出土のナイフ形石器には、A群の組成はみられないが、剥片を横位使用し、台形状を呈すB群が存在する点でA区出土のナイフ形石器に共通する。しかし、すでに明らかなように、A区では広義の石刃技法を技術基盤とする石器群に特徴的な单設、ないし、両設の平坦な打面より剥離をおこなう手法が主体を占め、B区では90°打面転移をおこない、剥離作業をおこなう手法を主体とするほかに、多様性に富む剥離手法が存在するなど、両地点では、剥片剥離の在り方が著しく異なる。B区の剥離手法は諏訪西遺跡の剥離手法に類似することができよう。一方、諏訪西遺跡より出土する石器群の場合には、資料数量が不足することから、位置づけは極めて難しい。A群のナイフ形石器(第219図14)は背部加工が完成した状態を示すこと、B群のナイフ形石器(第219図15)は2:1前後の長幅比を示し、古段階の「縦長・台形状」を呈す石器形状から新段階での「横長・台形状」を呈す石器形

赤城山南麓	赤城山西麓	北毛地域	西毛地域	小田
+	+	+	+	I a
牛伏・和田		+		
藪塚 (武井)	分郷八崎 +		+	I b 古城
		大竹・善上	北山	
+	勝保沢・(見立)	+		
		後田		I c
峯岸	+	+	+	II a

第6表 県内出土石器群の変遷

状への変質(岩崎 1988)がB群I類に指摘されるということに従うなら、諏訪西遺跡出土の石器群は分郷八崎の段階を遡り古く位置づけられる可能性はないといえよう。

したがって、勝保沢中ノ山遺跡の二地点より出土する石器群は、A区出土の石器群が後田遺跡直前段階に、B区出土の石器群が分郷八崎遺跡以後、勝保沢中ノ山遺跡(A区)以前の段階に、位置づけることができる。

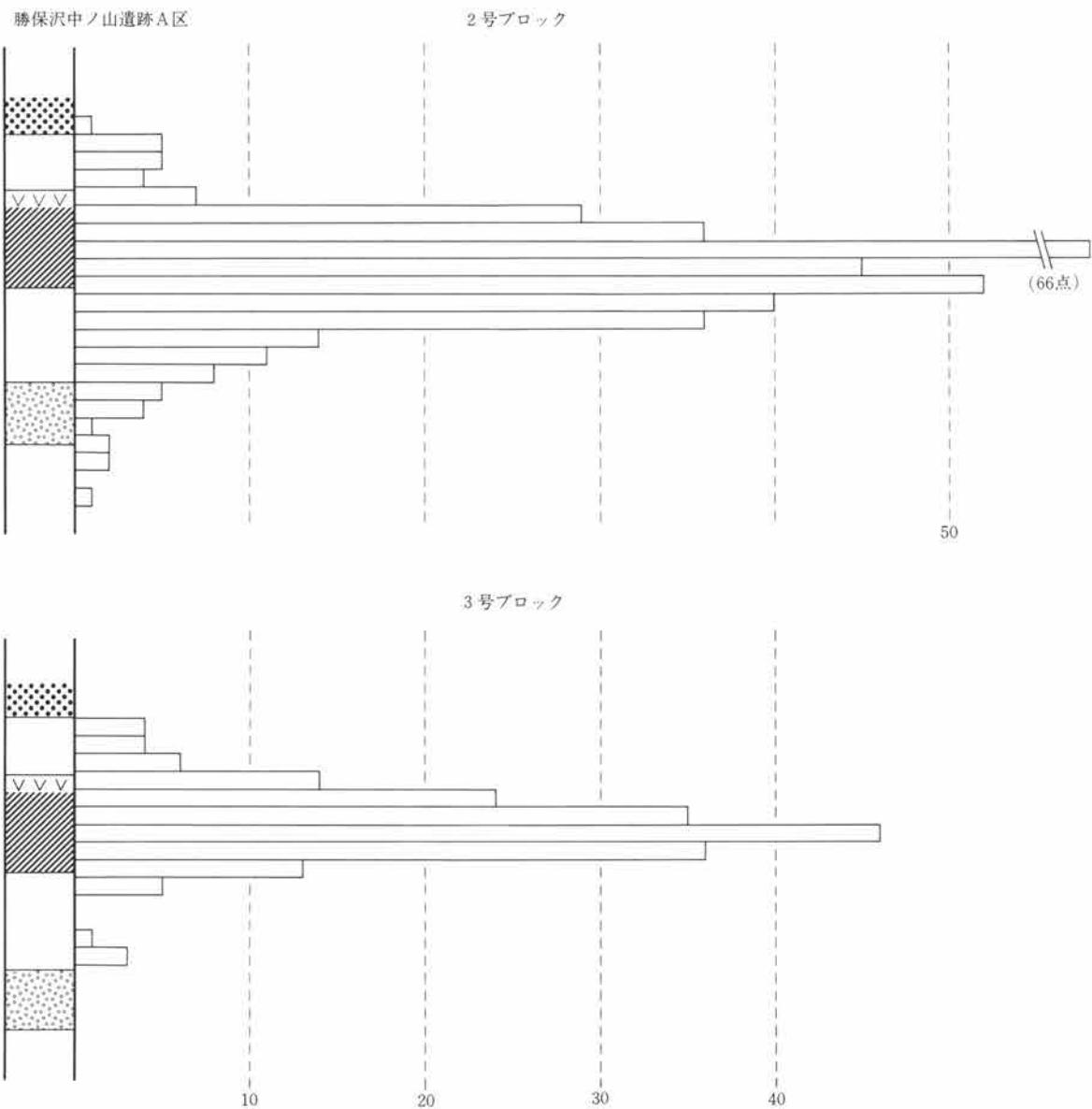
石器の出土状態と石器石材

a. 石器の出土状態

群馬県内には多くの火山が存在し、地域を単位に様々な状態にテフラが堆積する。そのため、地域を越え、各遺跡のテフラを直接対比することはできないが、As-SP・As-BPやATなどのテフラを同定することで、容易に土層対比が可能である。旧石器時代遺跡の調査が進行するにしたがい、赤城山の南麓や西麓、県北の三峰山麓などを単位とする地域では「ほぼ同様な土層の堆積状態を示す」ということを確認しており、隣接する遺跡では、石器群の相対的な上下関係は出土石器の新古を示し、出土するのではないかということも容易に想定されよう。^{註1} 上述の想定の下にここでは、勝保沢中ノ山遺跡と同様に西麓に立地し、石器群が暗色帶より出土している分郷八崎遺跡と比較するため、遺物の分布曲線を作成し、出土層位と垂直方向での遺物分布状態の関係を検討した(第222図)。

勝保沢中ノ山遺跡では、垂直方向での石器の出土状況を確認するため、石器が集中するブロック(A区: 2号ブロック・3号ブロック、B区: 3号ブロックおよび6号ブロック・7号ブロック)を対象とし、それぞれ垂直方向での遺物の分布と層序との関係を示した(第221・222図)。石器の出土地点が台地傾斜に位置するため、地形の傾斜に沿うよう1m幅に石器の投影部分を限定し、石器を投影した。その結果、分布曲線はいわゆる「ヴィーナス曲線」を描き、A区・2号ブロックおよび3号ブロックではXVI層中位が出土量の極大値となることが、B区ではXVI層下位が出土量の極大値となることが、それぞれ示された。一部では、XIV層(板鼻褐色軽石)やXVIII層(八崎火山灰層)を越え石器が出土する状態もみられるようだが、石器を投影するうえでの地形の傾斜の問題の他に、土層の逆転(倒木址No 2)のための石器の移動にも起因することが、2号ブロックでは指摘することができる。一方、分郷八崎遺跡では台地南端の遺物集中地点(Cブロック・Fブロッ

III 成果と今後の課題



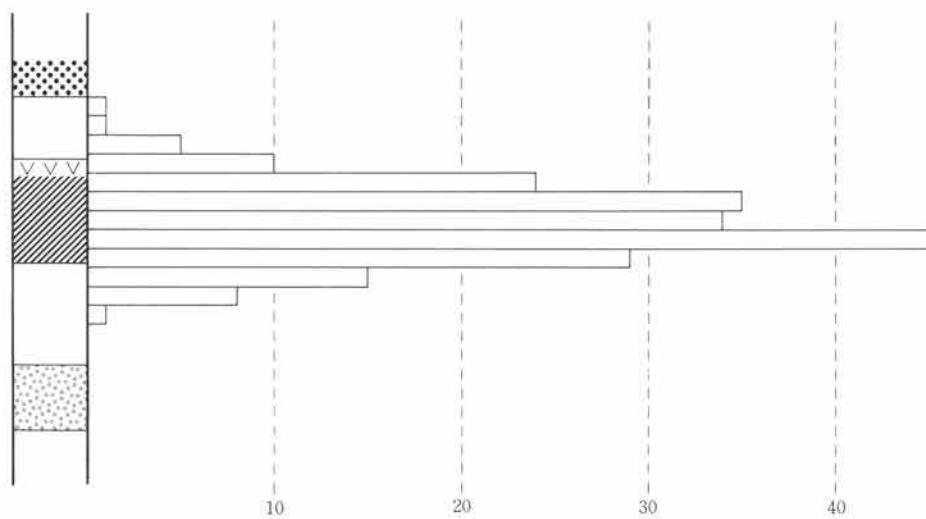
第221図 土層堆積と石器の垂直分布(1)

ク)を対象に、垂直方向での遺物分布と層序との関係を検討した(第222図)。その結果、遺物分布曲線はいわゆる「ヴィーナス曲線」を描き、Cブロックが暗色帶の中位に、Fブロックが暗色帶の直上層の中位に、出土量の極大値を示すことが明らかとなった。報告書の折込図(報文中の第12図)にも示されるように、Fブロックを除き、いずれのブロックも暗色帶の中位に遺物が最も多く出土する。FブロックはA～EブロックやH～Iブロックとは、相違する出土状態を示し、このブロックのみ黒曜石を主体的に保有することから石器群の同時性には疑問が残り、文化層が重複する可能性が指摘されよう。

両遺跡出土石器群とも、暗色帶の中位に出土量の極大値が存在し、出土状態には顕著な相違は存在しないということが分析より指摘され、見事に上述の想定は外れた。層序の区分や堆積環境の相違など検討すべき課題は多い。現状では、石器群の段階的な変遷を出土状態より盲信的に把え判断するには問題を含み、遺跡内の相対的な上下関係や文化層(石器群)の重複を検討する材料として、限定的に取り扱うべきであり、県内

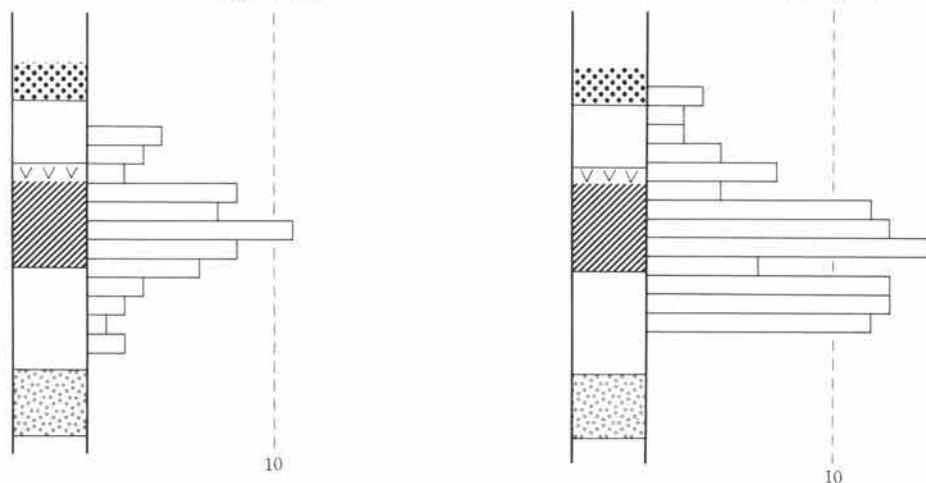
勝保沢中ノ山遺跡B区

3号ブロック



6号ブロック

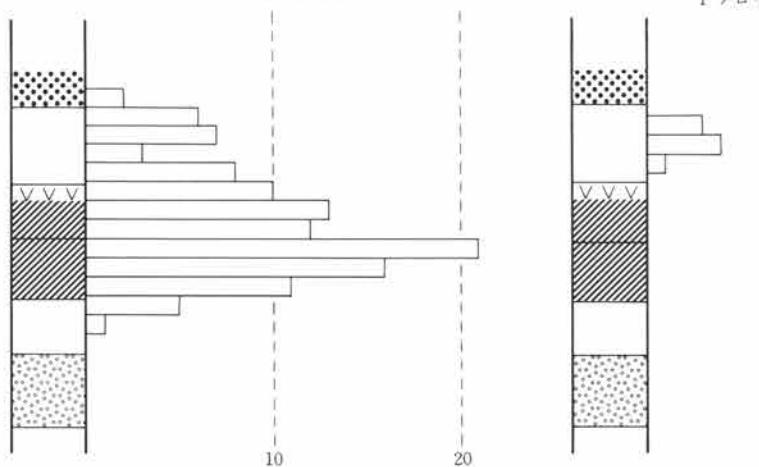
7号ブロック



分郷八崎遺跡

Cブロック

Fブロック



第222図 土層堆積と石器の垂直分布(2)

III 成果と今後の課題

旧石器時代遺跡で石器群(文化層)の重複が層位的に確認されない以上、石器群を総合的に分析し、石器群を構造的に把え、分析するということが第一の課題であろう。

b. 石器石材

勝保沢中ノ山遺跡では、両地点ともに遺跡の周辺で採集が可能な黒色安山岩や輝石安山岩を主体に、三国山系の黒色頁岩や珪質頁岩、信州系の黒曜石などからなる石材組成を示す。黒色安山岩が主体を占める点では、赤城山の南麓や西麓に立地し、暗色帯より出土する石器群と同様な一般的な在り方を示すことができる。石材の在り方については、中束氏と飯島氏の県内産出石材を対象とした共同研究(中束・飯島 1984)を指針に分析される場合が多い。AT降灰以前の県内の出土資料についてはすでに分析(麻生 1987)があり、報文中で遺跡毎に石材組成の概要を指摘しており、ここでは、以上の成果を下に問題を整理し、検討する。なお、地域や時期を限定し分析するには資料的に不充分なため、ここではAT降灰以前と以後に分け、石材組成の在り方を呈示する。

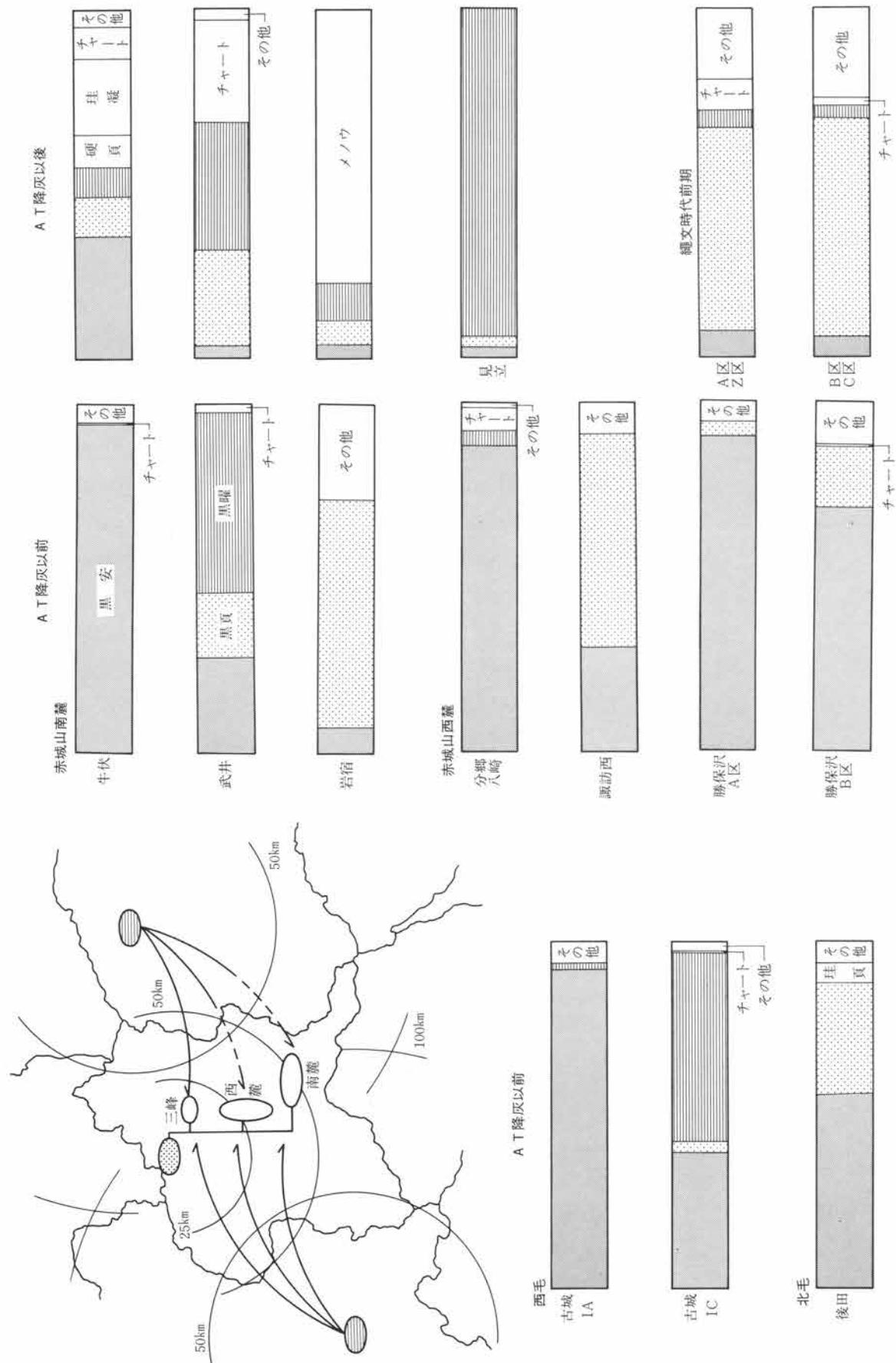
第223図では、赤城山の南麓と西麓、北毛および西毛の地域に県内を大別し、さらに、ATの降灰以前と以後に分け、文化層毎に石材組成を図化した。AT降灰の前後では石器に使用する石材の種類こそ類似するとはいえ、ATの降灰以前では黒色安山岩などの在地系石材を多用すること、「広域交易石材」である信州系黒曜石などは希なこと、AT降灰以後では多様性に富む石材を用い石器が製作されるという傾向が指摘され、AT降灰前後には石材使用に画期が存在する。

在地系石材を多用するAT降灰以前の県内遺跡の中で、黒曜石の原産地に最も近い西毛の古城遺跡では、信州系の黒曜石を多く用い、この段階では著しく異なる石材組成を示す。しかしながら、古城遺跡には80mほど距離を隔て石器の出土地点が二ヶ所(1A区・1C区)にあり、1C区では信州系黒曜石を、1A区では黒色安山岩を多く組成するなど石材組成は相違する。現状では、資料数が不充分なため断定はできないが、古城遺跡(1C区)と同様に南麓の武井遺跡でも黒曜石を多く用い、産出地からの距離に関係なく、黒曜石が遺跡に存在し、以上の傾向は石材の消費に際し石材の供給事情の差異が存在することを暗示するかもしれない。AT降灰以後では、西麓の見立溜井遺跡では黒曜石を多く用い、全体の90%を越す。南麓では武井遺跡で全体の30%を、岩宿遺跡や牛伏遺跡で全体の10%を、黒曜石で占め、遺跡間で黒曜石の使用頻度は多様性に富む。単位的な石器群の分布範囲が調査されているかどうか必ずしも明らかではないが、各遺跡間で格差が存在する。見立溜井や武井では原石を搬入し、一連の石器製作工程の存在が想定されるものの、岩宿や牛伏は石器の搬入あるいは二次加工など工程が限定され、石材の供給事情に差異が存在するということを示す。以上のAT降灰以降の傾向は、ATの降灰以前の様相に類似し、後述する野川流域に所在するAT降灰以後の遺跡とは、多様性に富む石材を使用する点では類似するものの、黒曜石の組成率(依存率)は著しく異なり、黒曜石ばかりではなく珪質頁岩や珪質凝灰岩など珪化の顕著な石材を多用する点で相違すると言える。

^{註2}一方、黒色頁岩は三国山系に原産地(第223図)が限定され、直接入手するかどうか必ずしも明らかではないが、在地系石材ほど容易に入手が可能な石材ではない。段階や地域を越え、黒色頁岩の多寡が生じるのは黒曜石の場合と同様に、石材供給事情の差異がその根底には存在したものといえよう。そのため、黒色頁岩の組成割合の相違が各遺跡間で生じ、「小地域内での交易」も想定されるような様相を呈してもいるのではないだろうか。

ところで、南関東地方武藏野台地に所在する遺跡を対象に石材組成を検討した稻田孝司氏は、石材の入手過程に関し学説(稻田 1984)を呈示し、武藏野第VI層段階以後、黒曜石の組成率(依存率)が増大すること、石材入手のシステムが確立すること、を指摘している。武藏野台地での石材入手システムの有無や入手形態存

赤城西麓・暗色帶出土の石器群



第223図 石器石材の入手と石材組成

III 成果と今後の課題

否とは別に、第VI層・ATの降灰前後を境に石材組成は変質し、多様性に富む石材を使用している。以上の傾向は群馬県内の旧石器時代遺跡と同様な傾向を示し、野川流域での黒曜石の依存率の上昇は第VI層段階以後の旧石器時代人の行動範囲が広範な地域に及び、産出地と消費地の密接な交流が存在したということを暗示している。また、氏の言う「部族長的役割」(稻田 1984)を担う鈴木遺跡では、第VI層段階以後だけではなく^{註3}それ以前より黒曜石の保有率は他遺跡を凌ぐ数量を保有することから、鈴木遺跡の担う役割は変わることなく、継続するかのようにもみえ、すでに、石材入手システムが確立しているともとれ、AT降灰前後では集団構造や居住形態の変質が予想されるものの、石材組成の変化のみから石材入手の在り方まで規定することができるのか疑問な点が多く、様々な視点からの分析を要し、課題は多い。また、鈴木遺跡の性格については、拠点的な集落とする考え方あるいは単位的な石器群の集合とする考え方、など賛否両論があり、ここで、鈴木遺跡の性格を検討するのは、自身には有り余る課題である。検討には別稿を準備しなければならないが、要は、第二の鈴木遺跡が群馬県内にも存在するのか、あるいは、稻田氏の指摘されるような状態が県内にもあてはまるのか、ということが現在の自身の問題意識であるということである。そうした意味では、古城遺跡や武井遺跡の黒曜石の在り方は社会背景や集団構造を知る上で重要な位置を占める筈で、遺跡周辺の石材組成の在り方については注視する必要があり、今後調査の進展が望まれるところである。

以上、群馬県内出土のAT降灰以前の石器群を分析する中で、言及することのできなかった問題を中心に若干の私見を述べてきた。資料不足や分析が不充分なため結論には遠い。現状で、旧石器時代の社会組織や石材入手システムを検討することはできないが、今後の課題としてここに確認しておく。

(岩崎)

註

註1. 1982年の冬、前橋市東部の荒砥南部圃場整備事業に伴い北三木堂遺跡の調査で、ローム層を対象に調査を実施した。当時、岩宿遺跡や武井遺跡を除き詳細な層序を記述した文献は、その段階では公表されておらず、層序区分は岩宿・武井遺跡の層序や相沢・新井両氏の層序区分を下に、「三分法」に従い、細分する方向で分層を試行した。その後、県内各地より旧石器時代遺跡の調査事例の増加に従い、地域により土層の堆積状態は相違するが、赤城山南麓や赤城山西麓、県北の三峰山麓などを単位とする地域では、「ほぼ同様な土層の堆積状態を示す」ということが明らかとなり、地域の基本層序を設定した(谷藤・麻生・岩崎 1982)。その結果、地域を越え出土石器を直接対比することは困難ではあるが、隣接する遺跡では出土石器の新古が石器群の相対的な上下関係を示し出土することを、基本層序の設定当時、予想した。

註2. 繩文時代には結晶片岩を多用する地域(県南西部)・チャートを多用する地域(県南東部)など、石材選択上の地域性が生じ西麓に立地する遺跡では黒色頁岩の使用頻度が増大し、前代とは相違する石材使用の実態が指摘されるようになる。繩文時代前期の勝保沢中ノ山遺跡では4,200点中2,600点を黒色頁岩が占め、黒色安山岩の使用頻度は減少する。周辺遺跡でも同様な傾向が集落の規模や時期の相違にかかわりなくみられる。

註3. IX層段階の黒曜石の出土数量は、高井戸東遺跡ではIX上で4点(全体の2.5%)、IX中で19点(0.1%)、IX下で1点(0.4%)、多聞寺前遺跡ではIX層で61点(全体の11.1%)、武藏台遺跡IではIX層で4点(全体の4%)である。いずれも鈴木遺跡IX層の2,094点(全体の5.4%)をうわまわることはない。